扶桑拾葉集

十一

和書門 類
一八二八二 號
二一八 函
一一 架
三五 冊

内閣文庫
和書 類
一八二八二 號
三五 冊
二六三 函
一一 架

内閣文庫	
番號	和 18282
冊數	35 (13)
函號	263 33

扶桑拾葉集巻第十一

目録

千五百番歌合勅判序　後鳥羽天皇

遠鳴御歌合序　同

新古今和歌集跋　同

時りけ御文　同

頭詩歌勘跋　藤原定家

白河歌合跋　同

常陸のまたちへつかはす文　同

林氏蔵書
大学蔵書
日本政府図書
浅草文庫

古今著聞集跋　　橘成季

頼綱百首乃ゑしにまゐらせる辞　　同
和歌初心抄序　　同
人のもとへつかはせる文　　越部禅尼
東関紀行　　源親行
斧柯序　　源通光
七十首歌合跋　　藤原光俊
治承歌合序　　藤原為家
宝治歌合跋　　同

扶桑拾葉集巻第十一

參議從三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

千五百番歌合勅判序　　後鳥羽天皇

とうくさきそまいりける百首といひし三十巻
ま哥合にしなし人々に判しけるにそのうち二巻
をわれとりてこれか勝負をわかつへしとおほせられ
ともよしあしを勝方とてかいはすへしとよも
難しとていふによりもおもふこと侍
歌左右のうたは文字はかりはとりとりよしあし
紛んゆへに様なをし給へしましく判のことはの

一所にしるせるやうに三十一字をはらひて句
のかみしもに勝劣の字をかきとゞめ侍り
見えたり

遠島御歌合序

同

そもそも歌は判することは道に深く
きまへしるべき者を撰て難波のよしあ
しをも分ち、まさに海のみるめにあらば
を定しむ。難の詞の首ごとに
卅一字のかしこきはしめとしへこし桑
の門まで。今二字九品のはじめにあるなるを
秋は、富の緒河の流をくみしますなるわ
歌の浦きよしと陽て、十年あまり六年
の春秋をくれて、又此道をもてあそ
ぶよはあつまりとも、従二位家隆は和哥所の
寄、新古今の撰者也。八十餘の命の露いま
るあやうし。野の雨燥てきこえてぬ程
てたがれしを悲しくして、今一家思ひの
ひところはあらそひきはめくのもとゆめとた
らへむとせしよ、是はよろしく為ましむ章
の其よめ日付くべくとかゝねざりき。

十躰の歌を先にあけて書にくはへらる。
人のつくろへりとよいはれいきの物
は始く六儀のさいは学ふへくもかうし
されはつゝ畏みのかうともおもしるに紫式の風
とちらん事亭憚多けれともかける
桃山の障をのそかんかためにえん人をまねそこ
つれをらへつまえ候。此歌愚老ともかく。家
隆ありあへるゝとし道にそむきたれしもちかく
きよしあり。哀にしいその家ゆかしとか
年をへて云ては是とはうへつれ。将
八代集の歌をむかし聞え給しえい。

おもかけもあるまかりけるあるさまかわる
まさらんやうつゝよの人々の歌の中にも
も。十餘年の名ある所の一首も及さ
新にあそうそはる同歌をとかえてもかもえとる
めかうしく給。その名のさねもまする六十の上ようれ
老巻としいふとも。さえともそれなるかうなへ
てしみゆるすなはちそうつてはかよはおなくて註
しはし

新古今和歌集跋　同

今此新古今集は、かし元久ちかからの和哥

所乃掌ゝる役くゝゆゑハ今の哥をあつめ先
しらくまちへ人乃はらえて定めにしく
二乃うゐ家くみちくあそひ物なし宗もみそ
ちあまち乃長昧ととくいをれいよ又あらん
むつうていあう形とも静まり是とみえ候ゑんく
乃風情ありをもあそうくをしとをゆへまる
くあようとく人やそうらいやしをも積りくして
集しまる所乃哥ゆゑちらせ数の多うちるハ更
事ハ哥とありいうちちうあしをあし次ゑぢん
身をうつし哥をといれあらます二十首まりあま
秋のを道てしゆゑる自ら深しとしいふうていふそ

万葉集乃やつれとゆへりえさうくハ代々わりつたみまし
うてある風やうしうま撰し首ハ稀なく人の筆よりの
うつしわさしとを聞えれハ其乃門月をのうまう
いはハうつり哥株乃稍あらくハ集めをとうさまへりへ
し首より集とゆふをよみすハち絶あうハあらも
あいきハいとくりくたれをなしいうともへしと
みえし精没不没人左り勅して假名の序と
あらし先そうハ則此集乃詮とん志うも
きと称せし先ハかもの序とかましからあら
へうよあらまうハよよあくすへての哥なる以
愚鈍乃数くあとあらゆるかとすまるのこあ

寸巻〳〵の奇の中かさねて奇奇むかうちをとえて
ひてくるゝ巻をこそ。ちらまれよりもの集をとさつ
へらまいあらん段もしそてあうてあみうろうハす
くれうなへし。阿弥乃うしに稿乃首を内侍り。
やへつう乃ゑの名うぬもん事ハ是とゆかれ
忘うゑつさうりふへてこ素のわうむかしにのとせ
给也

鴻すゝ里乃御婦を　同

されハ法蓮経をみちゑうれ偏ハしせく〳〵ぐ花
をほいうにしハこあんをうすうしそくしわ百

よすり一かほころの上のもゝう念りかへるれて
まえんこゝてかゝとゆくしてあゝハころのせわをそあ
さくうをほしてあえんすしん。よ方よ一ハわる
しそむよらほころしをあつむ必うらほにゆ
ちらしや出へしそれハわの方月あうせん念ん
くゝこれあへくうしにゑりうしてすそさか
このしほいせんそうの附りう方にらうまらせん
こんもなくすらさてハよしてあくゐうゝ月ゆく
のゝむすのかゝころのへよの世へうわうりにあり。
仰ろこともあるむよかりしうむのうほすてり場
陀うんハ文二ヨと神事傳まゆあ〳〵とこれう

つゝすゝめかりまゐりけるにてあらさりし円宗寺
そうかうゐんをつくりてこれをかんそうくは
まつのをとのにはゆかりのゝまへのあたりにて
のやうは後白河法皇ゐかうせられ
しことそのそれとそゆくゆくぬくかりふかくし
から升そうのこゝろさしのつもりのまつりを
まてかくるよしおほせられてわかちすゝめ
とかくしほさんねふるくさよはるとなる
おさいのしほとおほかんいこゝろまうの
あつまりかへりてしもそのひまさんなり
おほえそのことゝもみなしれるみかとにはゆるな

しくもとのしれけるに遠くまいりて三宝
あらせんらんくゆくとうしきんてしむ
わしくゝ三宝あらんこゝろのわしさいふかくを
すれとしんをうるへいそてしらんくのまつ者れ
そのはのしからなそうしはうしすむ
三宝大事といひてすむかこしくてくれとこう
せくいにえんのまことをのしてはえかお
ねかふこのこゝろのわしはしそれともへとく
よしあくあかゆきいかてまつり稀んとうてう
生死をいてんとこそおもけりを申せゆきて
せめくくのことはくつひおもてやみそうのこれは

かやうにかんなんとうせらるゝ大寺の大佛くやや
うけたまはりておもひたちて一日もおこたらさい経くや
うすりほんの法花経ごのミのくゝいいくに
もおのかつくもらぬんとくらしらにんと云ん
せしゐよくかつてそふとひつうんまえん
てかなとあをもむれしかもしるせ関
白いけ乃さうりをいゆかくかともかし記也。
つもそとりこともとむらめくへらし次

顕註密勘跋

藤原定家

此二帖の注をとしさるほうれはちくへきぬね。

もたらくとかうらんいちん匠のしかすみ
このむらひらくしてよりとり昔こそゆうり
見ぬ事ととも一紙ありかさの子匠しとも
まひわねうねかうんらん見られ前あ雨し
ゆゝはぶうくおり云はち孫んお猫代め
くとかゝしこれありうあなくれるい
まさうに匠しておこことまとせなも生へ
時於弄辞定の庭方合判録ねとふやうきさ
し事いひうくしさ目らこのむすらとる
ていなのえわうくとつひはうら匠うかか
人うこ見ゆしりし、ちるされうる事ハ奥

義集とうつしおかしはいわそしらゆむかしの葉
ちらの続ありしをてゝりすゝみれうくてゆるなり
ひ給しことにいひしてかくすゑ給らねめ
かさのつれつ〳〵部しにとよろしくなり
みえ給ふ遠ことはめくみ小雨すりのちう
ひし事にことゝぬ人なころ〳〵かくいわ
りさは年給ね家風続よくこの方りか
たへらすていくつも給しんはそしよる
孫に道をわしかもこれはこえる人の
おかしあらせんはたてつまねなは甚奥給
つきりや。月池万ねなりひさをね人りも

されどもまんいはしかくてくいぬる
継しゑしも御よのかたり出されはへりし。
いとまつりなつて又此事ゆ縁ありたる
されてもいれしく色ゆく覚ゆほしく云たら
ねな持縁もあさかつてすへうら給しる
なも此だに勤学博覧にこれあり後ゑめれ
いかてくみ給へん。まこしの実物よそ給し
な文なりとも次いてのなりくれよみなかて
てあるも此集の続と三代受つゝ継ける人
ゐるりとなくもしてそ給をたしくらちそれね
へりしぞ此本のかたへ年をはさいたるものや。

柿本徳流は貫之自筆なりとて古今集
きり散也又清輔朝臣各うつしすく
なくうつしけるを寧祠は真名仮名乃字を
も一字ぬかへすその体にうつしんしをも
かきれ侍れとは是又真名仮名は仮
名にて字作此本当時不見不審甚多歟
信用しかたくおほえしかは先年前金吾の
説を受てうちわたしは此乃説をうたかふ
なれは後々まて要とかくて我家れ説に依
てやしされとしともむりとよ仰りしまて
を来あふ人清輔朝臣の注古今とやゝ子
子と見えを仰し侍乃外れすんはとてもかくも
まゐりとみ仰しよのちのちれて又比秘なと
やしよの見なれ人仰しは後もたすしかれ
いふ侍りし事ともいろいれと古今をやまち
なんともつらき侍し

宮河歌合跋　同

神風や宮河の歌合勝負注し付へきよし侍
りし事はむくしけ二年あまり小も大かりぬ
れとうけれくは宮城守神乃よくみそなはん
事をきおそれ我てハ家に仰かたらふの義はあさ気

よみける事とつかしものにあらず。よりふみて
めしあまり代はぬきて、いまも古今すゑの趣
をたりとも又、そのつゝ難波津の師と言
ひしかども、さらに出雲八雲はりたにいゝくれ
みけるへよ。もろこし此第の時ゝにもいく
りを勝れ中とりや中。詩人才士の文作
にさあるなまりにきれくなしくや慶まさ
しるの義の。実まわれふ所なきさんなることい
つきをあしとひ。いかゝと深し
浅しとも。ひとへは風しきは。雅よまへまか
ゆくいはまとなしてしれへときもあり

ぬ。時よりて所につきてく。ぬよみほめける
すくひよせてあるへき。しかれは此歌
合は、わさと沈思ひて合せくらへれたるに
あらぬ。多くれ侍くは字法にわかるゝの義を
まもるひく。たゝしひぬ風を好みて通風るを
とやりひあくる勢つて。左右にきまりられく
侍るは。まみ此心趣向奇のきらくさ高して宅
よりも及はく雲よりもならりくし。此
されるあつれて好みされと。當世の草の
みしるさ調は。みつれくらきかつかいさん
くとも眼く。故に好ましくいしきされは。

波路乃あしわけさはらぬ舟のみ数まさるよ
ひくうらいつ舟に乗りておりゐぬものなり
まいへ
らき旅人。善乃光明はこゝろしたりし住
こゝまで行かれ清浄、雪乃葉と御なさるま
行事にはおのれ世一乃あさましきみなれ西
霊おは佛乃底懐りこしきん西し夜ぶら
こゝふ人を縁とこゝろむもとめて昼よ
又それにやしき終り道とこれむ所も
かつとふかく鈴いよくみてちなり及ぶん
住吉乃五乃ふりしつ人く、いまこゝ笠山のを
めぬりこゝら捨まゐ乃名をもとむ九重乃

月のりよを行かく清流乃くまつてくされ
宮にも、御夢のゆめむかしの下北摩の
とひつ深あの、深乃にも捨ふくさすれたつと
正末乃ころまうし道をらせとあふれ人く
捨康乃舞はあちこへ、八十瀬の波はなる
うへにつまりよ扇河の、程ゞらの次はしよ説
と宮を何しぐ、宮川の清流り蹟とも
きつて住山乃ところ承はれも甚霊験や
はしまく、今きて後こゝろの人はおさなりしまつり
あふ、むかしと御ゆ古としわれよんもしよって
まことしてつまゆらぬのすゑん

君いまたつらき世の事をみぬとも
思ひわつらひのちの春秋
哀し　　西行
春秋を君おもひいでば我はまた
月と花とをながめおこせん
家隆へよまるゝ文　　同

庚申に集りしかれくさましぬるをもてあそびく
ひかるをもてくはあそびては中にあるなを一ふし
ちる年に歯せしとてきやうらみんはれ文をも見
てよみかぞへばねまうしはれあつくしちてい

くるしも心はくるしもおもふ年ふる雨れはなし
[illegible]
[illegible]
きよらかなり歯三首同じ[illegible]
[illegible]
[illegible]
みれもさてはれとしも得はるゝ文[illegible]
[illegible]
[illegible]
よかしちやうとのけ同じ[illegible]
やうあるぬし[illegible]ものはなし

みえよろこひあはせけれともいかにそや、さなから
くるしかりけれは、さてはよろこひあへり
ける人あまたありて、いかゝせんとてはかられ、
わらはへ我かたへやまうて給ひけるに、まことに
さはりありけれは、人々おほく申しあへり、
のみならすわれて、成家ひとへにたゝのみならす
ねてくるしさに、夢のやうなれとも、清かうへにて
れいまてあてゝ、からうして、根をは剛まいらせ
いうはかりなく、数を尽して、世にためしなき
ありけるにつけても、それにつけては人々申しける
まうしはなかれとも、ろくしくあそはしけるに、

善光寺はかそしよういへし白河鳥羽院あそはされ
けるうしといふなかれ、世中よろしいまへなりし
しるよしも寺まてとかく申しけるかは
ていたつてひとはへてしまうさうしさう
みまもろうけるに、やかて出しかれて
おうみへてはや見ぬふみみえけるに
はまうのはかなくもそのいかゝいかにせん
ひきいかんとゝひ、若もまいらせ
よりてそのあとには、又さりつるものを
まうさし、行かうしのへしきりつゝ、殊にもさ
しられとやうすゝしてあひてもなく

遺書は尚しにてもかくわさ海しくはま
りかなとしいかりつまゐてやゝのころうか
く光え氏ら経をみて廣中も湯沼しゐ行
りまむ是にかくまれは大いうかうく志物し
めし遊覧しとまう絶くうか御りしうく
はつて所りと共に清の済はまゐるに加掃設殿の
氏升とのみ経かうとるに三条のいまつあてまつ
りうる御方は光え氏に面付たと共にそれは世
聞とを父故なれいりとかくらん御しなりや
せたつと推量しはし。覚定ちへてうなれ
しこまも名すられしそよ御成かり

つさはもうなれはうて夜なれ流れのさんまうるえ
定なの御ちうは御国のみなんあうのはうれます末代
にかくみそでとあうる不思議うもいはて心も
洞も度なれはいふとなかく上れ上さて中下に
兵もは海しさにあはいまてわくるられ太郎
二郎なんのちうたいちうてもまとはつくまても光のち
られてはすうなるかみあしく道の子まとれうく
まちなかしはまさのかれ共も去るへてうえ
はま枝ゝ身もいとし可ゆひちてまとは粒くのの
ちあれまりそも。とくしうちてうにやうれは
色しあさ海しくらもうつこれはいかてせてゆかり。

総して三月より四月桜花さかりをさしていへとも
四月にはすてにはな盛めてちりすきたれは
此ゆへによはれ

長綱百首の端に書ける辞　同

わきて御製よりは、此歌集にとゞめしむる
あとのをしなてみえはし題ありとしあひて神妙
はかなきことくはしくかきそへしたれは、御製にのみ
のそも非常の心とも、神妙にもすくれたる
は此すゝめらるゝしさては、今此の、此叙の
御歌美異常事にもあらて、奇特はへ

くれぐれもはとくあはれ、同あひくをして奇
をろくとゞせ給ひてくはしや、唯此変性のこと
とりはかりくは、卿も文字たちまちに題
の奇はあはれへき様とともれはやんれと近
代の人は様かくるをかくる作にてむかしくとく
よみては一定題の奇にては更猶の時也、此の十
年かきれ御ては歌ありとも、是青とは
もしれ、あ奇一もありてことをみなをてあ
きふはしとも題をも尊をとし作品もあらてよ
見はしくはひて天性のやうとかへる才覚
てあしこ奇にて絶ぬしかとも、ひとつてはなれはし

も。近代かしこしとおもしかるまゝに優なりけり
と。いへる事のあるは也。今の浮世はなし。を
の作られつゝ要とすれはて。御出居へ民部大輔
九条の尉殿内海いれとも歌のうんとはるに。此うへの
されはとかく我記太史馬免か。めでたき御のかららひ
みのもて。腕にはもちいてうんまゝ。人もえとは
色ふおもて操を侍る一意月といはれは面極をもてあまりし
はまりとやはや也。諸への名は義の摩の御弁一書に
なるよなからん者擬られんとも。ずれはつきみつき極
とくしとくやみえつゝさて。色しもしとらひは
ちんとにわりしめさん。此也地とはしんえ体ては

泳は色しも文ひつまいぬ。免羅ゐりしまえ
はやめつかね辯也。よくよみつまる事はらん
しらていふつまいふとこれのとはいりしめ
さいむ道理おもひしりて。大かたのことのやは
まし。信合ちいかりすて。いま思事ともや
えたりしんりけ。好のなやみもなん安きす
なりえて。おほよくとやはやし。此歌詞す
かくいはせよく作やも。一定ゆうりみなる
花えしまりは色くは

和歌初心抄序　同

抑和歌ハ天地ひらけはしまりしよりこのかた家
訓のりくあそい聖邦とも人を和らく字
習女丈婦乃たのしひとなり田夫野人
うけ川山の有情非情鳥獣魚虫まて
も分かちなりける事なりされハにほ
くへ人を惟ひとうゑく歌の此道を翫も弁
つきなかりさる聖高木石よ及ほすなふてうふ
き月日を経しらり露の命を勧しきにうし
とく羅綾つくりしるすさのとくて一朝を
霜し乾の色そめてもいうしのうつろひてあかぬ
ちみへのすそしき緩し尽るの雪ともあり

身もむなしくなれり桐の紅葉くちはてきその
やうきなりい給ふれよろ川嫌のかけり
何乃いそひとも色つさいそうくたまりや
人なりしくへつかはきれ文

越部禅尼

海川いそうれはかの社さうあかれはて集
まゐりてはまかへしくられしうよみ
らひみはていまをくまを見はつるなう
うるめし此命も三とひまてみはめる斉
まとりていなえりのうちよめてたくはけら
も見はさそて玉河撰集のたとらうえたくあり

のちのよとなれどもつくりて。詞は西せいさか
まずはつくはゆすしる目のをよしはゆりしと
里ての労一ことて托て得えはへ。そのゆへなら三
代集は事をのく世もありじつしもうそく
色ふく里はて。詞れをよふ事まふう増ゐ
しられて。さしとさはぬそのくらも拾
遺なよ紀歌あまりおかまてはゐろ世
かれハ撰ぬてられぬるやうけもしく
は金葉集詞花ハさやうしくかるやうまは。千
載おちし清まり西てよれ新撰のしらめて
たくは序れともはへとかもやらん太やうは

覚は。昇もいつうちくのひさなからんとも覚え
はいすは。新古今又妻の花秋の紅葉とひと
法まこえませうゆ。風池乃秋の月雲龍羽雪
其和とうやう。詞ふちして。ほとつゝう
なり。洞つうひまえ。かつうしくけうう西白
く。家隆卿のかんさ序さらふ。詞及うくさ西西か
かまうハえされまう事ともはやうまは。新勅撰な
かくれまはいすは。中納言入道殿なるの人の
しては。ゆりてどうそみつてたまいわうくいさし
かりまそは。ゆりくうあそたくはれ何ゆうえ今
いつう勝れつし西はさへん。其事をなりさ院とう

里御製とてはべり。同じもられたまはらで
そしはべりし侍りくはらかに。道つみ跡あれ
ぬかるな。いろいらしとてわりしなりけんと。入道
殿の御ときかの物語侍七十有ばかりやけれ
はかなきことばかりやとうけたまはりしかど。左右
皇后宮大夫俊成の孫にて。定家
子とて伝へうけたまはる物語侍のみそてたれば
伊勢の海べられてそふかく深く根ざせるとし
らぬ名もおぼえ人の。時しらなしすまでにはかり侍る
まくいひおきさる。それもさるけもぞかくぬる
ぬしもをとむ。あまり示しくぬしも待るくに

へも入るぬ。おほくものこれは多けれ。まつくり
さ女房の。清少納言がつれづれ草にまで
ろ袋のすべてまでも。讃岐の人の中にか
まつそのうたかきつくしたり。袋おもしろ
もたぶまて。あるはかくやと覚えて、それ
と。宇治殿のこそのほうそそのかしけりて
くらしはべて。鏡上扇しくも書さぐって
まつりしを。やうやう帝これをさらに覚え
は。帝より詞のなかれ候ふ。文よりはすこし
若て読くしまゐせさせ給ふ。腕も動かしまゐらせとやは
つかうことばしく撰し出させ給ひしは。勅撰

命ハいくたひ見てあるあいてこられし給ふ天暦の
年とるや浅猿の後にて帝のはかなしと
しくはいかなれは帝くもかくにうれたにて事
ときいてたにはへてそれ〳〵又浅ましき院の御孫
出羽門院の御子とそてともにかせおはしましたる院の
ゆらんしらぬめきもはく取はへしらせまん
のぬれよ入りとうけてはかりよさそくうは
くつうるしけるにおふこそ注もとうり
て並は年のますらりなはまれなるは
らそ見え系もしてはは色
よれは〇ほまされし人もはまね

行くの梅はゝこそそれはせ翁
多くときこえはへてとみてい字してうとさを
人ありしけりてもよくはひぬり、たりしとく
うまいらうもしくすゝみてはとりもとりそへ
しく花宮の年もあらそ猫しくつゝ御し
く見えはへても思ひはまかくてうれしらう
しそはりのみつもうれぬ内みますこせてちく
樵くしませさ身たえしませ命はくかくし
はましとみらてまつる身はぬらうろく〳〵
小侍従のはしめのちるうふはしあのも
しくは

霧のとたえにしてさなは見里らハ
あらし人の遊見やハ
秋風に人まつ露にぬれつゝそ
消なは消なんとしも思ふらん
わき海へくれいはひ思へハとうちうちみても
なれは給ひなとみえて[illegible]ぬれた
こ[illegible]くかすさしく月日その後を
うりしめらの新そ（めイ）られしき（さイ）
みつからんとも[illegible]あつまのゆくへ

東関紀行　　源親行

齢ハ百とせの半に近つきて鬢乃霜漸冷
しといへともなすことなくして徒に明し
くらすのみにあらす。さしていはことり徒ん
後色しとも、いりいは定める心は[illegible]なれた。彼白
楽天乃身を浮雲に似せ、首ハ霜蓬にたくへ
と書給へる詠にも思ひあはせられてしまし
金張七葉のさかへをこのまれす。陶潜五柳の
すみかを求むれとも、深山のおく嵯峨の
庵までもしはしく思ひやとるに移られて猿乃
かりの住居つゝ人並々世にもありて道に入
斯ある見所身ハ朝市にありて心ハ隠遁

よわり猶なりゆくまゝに、思ひのほかに仁治
三年の秋、八月十日あまりの比、都を出て東へ
おもむくことありき。まだしらぬ道の空、山かさな
り江かさなりて、はるばる遠き旅なれども、雲をしの
ぎ霧をわけて、しばしば前途の極まりなきにおも
むく。漸く十余日の日数を経て、漸く下り着
る。武蔵への山、鎌倉野亭の夜はこの海辺
水流の響たゆる砌よつて、目より川
ふるかはりゆくとうる道て、志深く人を
あはれとのつる波の船入りぬれゆく
ぬる。東山の邊なる住家を出て、逢坂の関

打すぐるほどに、駒ひきわたる望月の比もや
うやうちかき空なれば、秋ぎり立わたりて、深き夜
の月影ほのかなり。木綿付鳥かすかにおとづれて
遊子猶残月に行けん函谷の有様おもひあはせ
らる。むかし蝉丸といひける世捨人、此関の邊
にわらやの床をむすびて、常は琵琶をひきて
心をすまし、大和歌をよみて思ひをのべけり。嵐
の風のはげしきをもしのびつゝぞすみける。ある人の云
蝉丸は延喜第四の宮にておはしけるゆゑに、此
関のあたりを四宮河原と名付たりといへり。
いにしへの藁屋の床のあたりまで

あふ坂よしなあふ坂乃せきみ
東三条院石山に詣て還御ありけるに関の
清水をよませ給ふとて給ひしかは御亭
あふことをひさしくあふ坂の関水よ影みえて
紀そうかはしくこさとゆかしきいふなる時御
あつまのかた義よんかそまれ。関山氏色
めてたし打出の濱粟津の原なんとうけたもい
まさ秋のうらなれとさとかもみちも見えぬ晋天
智天皇の御代大和国志賀の都の是なりの文より。近江の
志賀の都と移しおはして大津の宮とつくられ
それと安中とも此頃いふなる皇居の跡そ

らしと見へて義也
伊波や大津乃宮れもあはしまと
名ありて志されむ志賀乃花口
眼の花もなりにせうこの古轉らゝきて浪よ
湖みるかまあはきれて。波満新書沙弥か此歌
山もき。此海を見て浪にあられん云ふ是は出れ
名み。濱行舟のあとなきて浪。浪なるものかなくなりか
そし
世の中は何にこさりし舟よりそへ漕し
かゝめしあと波そなりしれ
此頃をもりあきて。野路なと云所よりすゝめ業

の末露しげくして。旅衣いつしか袖の末にこほ
ろをし

あけまよふ野路の朝霧はやはれ
きもしかつらくしめかくらし萩

志の原と云所をこれも。西京へおもむく堤あ
りけるは。里人佐取をとしきき。南よりは池のおもて
をくみてわたれむ。かひの汀みぎりぬきさまに
のしえ波の文もひよつきする。畠山の秋と
ゐさきよきと青くして洗濯する。渕済をと
ていへりひくおしうつきておひまよわき
かきくしと鴫のうらむまくよひちかふけれ。

かりしてさりともするやうなり。歌と友川旅人この
宿よりつとまりけるか。今も所をとりてかくれ
こゝをくして。数年も波いらし。なりなとゝめ
しもかりけく世のすきは。荒香の汀の渕瀬
まいりにしまうりとやわれを
行人をとゞまりぬ。里とかよひしまで
あれのゝ海さるのちれ志のよし
綾の宿よりてぬれたる。着なしれ翁の家合
けり。老けるいてきよきる家れ中より。綾山
いさこよりしてみくゆむ。年へぬるかたハ老
やしめかといつれハ。此山のかりこゝしかを見て

宿とりて海わけて見てくれども程なく行ば
りうえ舟に雨ふりてうちみるは
立よりてしばしもはかれんうつみゆる
志てしぬるみしきみのまをとこと
行書のかれてむさき寺といふ山寺のあたりにまと
海見えぬまいりかりてとこの所へ風寂なく
程すくよ男ふりて船まいはまり引人まね
あそこち侍枕ありて清の影暁の空あり
書信く彼岸寺の菴の草の庵あり
林見をりくやもまんして気なり行末
達れ猿の声思ひ侍りきかれくいとあはれ

物かなし
船出てくいくらもあらぬ程にいかかり
かへりしいへにかぬ庵の秋のかせ
此宿浜出て笠原の里京打とまる程もり
また宵の杜と云福村ありて下草ゆらに紅葉
紅葉はりつつんりとみもそのかく梅
月日なれど塵うつし侍おかめ
かりてしなりあけゆひはとく霜を
急ゆかれその杜の林しき草
首に号して清水の井とて是れは浅くして此末
乃末さの岩根より流出る清水頃見流しき

まくすゝきかりける。実に身にしむしたまひけ
おかし。余艶いまゝにつきせぬゆゑをしれば。後宮の
議人多くかよひてすゝみなん。かの班婕妤か
团扇の扇。秋風よりさりげなく皆忘れぬる代は。末
世の道をも照らす。さん事は物うくなく。
更にいそがれし彼西行か道のべに清水
流るゝ柳かげしばしとてこそたちとまり
つれとありしもゆかりの本意にや

　みちのくに清水流れもしらふとく
　　とりしやせむ旅人そかれ

かしえ原と云所をすぎて。茶店の四関山ふもと

くさまくら。谷川寺の庭に着給ひ。山風雲の梢
に吹音どうゝと響き。日影をみてこの木の下道
おもひしにおもえそみれば不破の関
庵なり。黄庭の板庇ゆ年経にけるとみゆ
みとを後京極摂政の兼ねしのちは。秋の
風とよませ給ふ人の哥をうつしいふれてむかし人を
風情を忍ひくらべたまふ。いやしき民の賤代のと
まんをゆかしく見置き。家をもみなしも打ち
ぬらみせ川と云所にとぶらく秋更けるけし
き川端に立出てみれば。秋の夜中の晴天。
清き河瀬にうつろひたる。照月のさま数みゆるぞか

里のみちを思ひ二千里の外の古人の心をさへ
やられて旅の思ひいとゞをさへがたし。ゆかれ
八月の秋にをくれ深て。花洛を出て三日。襟
湘川に宿して一宵の吟をなす。秋（夜イ）の日
の月にひとりかなしく。信後途一千
里の雲を隔たり。故郷の夢書
にのみつねては

しらざりき秋のなかばもすぎぬるを
かれ旅ねの月にみしとは

かやつの東宿の前をすぐれば。そこらの人あ
つまりて。里もひゞくまでのゝしりあへり。

けふは市の日になんあたりたるとぞいふなる。
往還のたぐひ手ごとにむなしからぬ家づとも。
かのみてのみや人にかたらんとよめる花のかた
みにはやうかはりておぼゆ

花ならぬ色香もしらぬ市人の
いたづらならぬ家づとぞみる

尾張國熱田の宮にいたりぬ。神垣のあたり
ちかければやがてまいりてをがみ奉るに。木立年
ふりたる杜の木のまより。夕日の影さしいりて
朱の玉垣色をそへ。木綿四手風にみだれ
たる事がら。物ごとに神さびたる

中にハ。孫ほゝ出見尊の哥をしるす。
梢もさか海宮の后よりたまふやうにて見えて。
まくらきとかりうた嘗給ふ。其後よりの
哥どもをあつめたる人此いとく此文ハ素
盞嗚尊ハ歌をよみて出雲乃八重垣の文を
首とす。八雲立とよむ大和言葉をかゝるより
こしまりぬれ。景行天皇の御代ハ此の
御哥と云事を師のまとて云出。又云此文此布
諸草雜と号しまた飾ありけり。景行の比
子日本武尊とかつ。夷とたゝかひ帰るに経
海。首いはるとなりて云つらねる。翁は桃花園より経

海とも云り。一條院の御時大江匡衡といふ
博士有けり。長保乃ころほひあさつまに
南閣の字まて下ヤかうをもて大般若を書て此
文をて供養侍るとけるに願文かり。吾朝已よみ
ちいさき経限の文は。古のよし海より始む朝
まきいて見くるを法として云り。義よみかそ
くしやう侍

　哥八重のうつてやくわりのうて海し
　法のうきみ代まむしけるとかきた
おのれたる出演みに竹むしくれて首阪乃
月影ものかくをあまりこたくさとつれ

まことに旅の空はまさりてところく侍りしか
哀かきりなし
　十八日浜松を出て行くすれはみさ
　　いうくしかひのうへをくるしさ
やうく秋のならひ二村山にかゝりて山中にな
ることあはれにほとふ東側にしみて海の面
はるかにあらはれたるまに浪にみえてはてしもなくて
山路につゝきたるやうなり
　　亀をしを二むら山のなかそらに
　　あとりと思へは浪路なりけり
ゆきゆきて三河国八橋のむかしかたりにけれとも東
業平杜若の哥よみけるところなりとかやみな人しられは
ゐの人によみけることありしをみなもとより此あたり
くそのあとかたもみえす。たゝ沢草とかりしき物
いたつらにしけりてのこりてなむ
　花ゆへによそになかめし杜若やや
　いまそ此の沢をたちかへらん
源義経の昔此寺にて住けり時と聞けは
此世のあはれ深くいつれの寺よりもとよりゆかぬ
三河の八つ橋よりこの沢やゆかしきなるらん
とまりにもかゝりて思ひ出られて哀なれやそ
此しき雨を出てみやち山をこえ行にけり。赤

故しに宿あやしき家よあやしきもの人々におほえ江定
基が家とおけるも、説て云ひ出るくをかくし、
人此餘りとかなき此縁一てにつ添ともおもふ無
別きとおもしくし由もひの名をしもとおもふ、
数乃作りけむしきりんなさくみちの
おなまは志き日をたてしる宿乃契れ
いふくうあるねなきはめへとし
おむひの川系に升出よれたふもの皇るに候まに
してよなく思ふし、秦旬の一子継星とみ
まきしたまんのかりして、業去とをり蒼茫
たるき月の夜半有、いかなかるんと言ふくれ

かも、我まるにけく系の中よは継る路へ出れ道
ありくにけ来をもましひめへこさく、古武紀の前月
道の仁まきれ事はなく、拯鼠れなる柳をい
まさ法ともの地よさくいかきれともにいへとの
人のもとへとまれともなりて、まかふしの呂
公奥の国の武王の弟也、成王のこ云として燕を
云凌ともいふなる、斉の中なるか治しける
ひらけの其業のうちに志なをなく、路とをこ
身ふ河、つまてへよまてしめくまるくの我よ
いはりまくもの中をしかなみ、宿霧くもへ人の
悪としくるや、重に羅しもまうなさめせやし、國民

峯やらく、も徳政を施して右兵まゆかし
給ひけんを枝末殺数めくらし、渡なかりし
けりしせき。後三條天皇東宮にて時の
しけるに。学士實政任國に赴く時の
民こたとひ甘棠の詠をなすとも。忘るゝ事
なかれ。多年の風月の遊といふ。御製を
たまはりて。しかなしみを忍ふらんやと思ひ
くらうしたまはし。彼菅の身をも忍ひかねし
追ゆ。人を肩をも比へ[illegible]道の[illegible]
の綸言（類イ）[illegible]
御[illegible]

哥の餘執とくらゆかしくなりて（そうしイ）。彼甘棠の詠
さまでの事。さだめなく定なたちかしとぞ
思ひ出る

うへ渡さくしぬるしまれあしの柳をうつ
かれそのかげと人やたのまし
豊河と云宿の前を打過るに。ある者の云を
きけば。此道をば昔よりよくる方なかり
し程に。近比俄に渡津の今道と云
方に旅人多くかゝる間。いまは其宿は人
の家居をさへ外にのみうつすなる。
ふるきをすてゝあたらしきにつくならひ定

まれることゝいひながらいかなるゆへなんと覚
束なし。昔より住つきたる里人。今
更ゐうかれんこそ。彼伏見の里ならねども荒
まくをしく覚ゆれ

みなれつゝふるさと川のかはる瀬を（とイ）
いかなる人のうらみそめけむ

参河遠江の境に高師の山と聞ゆるあり。山
中にこえかゝる程に。谷川の流れ落て岩瀬
の波ことごとしく聞ゆ。境川とぞいふ

岩つたひ駒うちわたす谷川の
音もたかしの山に来にけり

橋本と云所に行つきぬれば。きゝわたりしか
ひありてけしきいとおもしろし。南には潮海あり。漁
舟波にうかぶ。北には湖水あり。人家岸につ
らなれり。其間に洲崎遠くさし出て。松き
びしく生つゞき。嵐しきりにむせぶ。松のひゞ
き波の音。何れと聞わきがたし。行人心を
傷しめ。とまるたぐひは夢をさまさずといふ事
なし。みづうみにわたせる橋を浜名となづく。
ふるき名所也。朝たつ雲のなごりいづくとなく
よそきも心ぼそし

行とまる旅ねはいつもかはらねど

まれく云海面の様ありさまは
さすが此宿より一艘とまりしやとあわ新
ふきたれやか（ヤイ）屋のごとろくまつて名も月よ
星月の影量をるすくはし入るる折しも君
もあまくこみえて中よさらしゆをあそびけ
ひしそ艘も浮かし磯のたよ晴天をみると共
ひやうる打縁しうしともくよらて翠しか
よめもはありさかさけを新もたも始
月はうつりのうろうてえきまし（よきイ）
名所めりく花須も方りし此宿とも打出て
利なるそれまひさいの家とも宋よ出

見。小島は晩くとそろふかしく。島は海の流
きし。鍋花繍草のたくひともえ須臾
素沙のうあうて。書は懐ろよ似うもこ
松うえくく生添ひて。塩風梢よ蕭颯とあや
しの書は唐画くとあり。漁人の釣客はやし乃
抽出や。をう浪人。求むるに遊京はまれて
涯ゆりもよ。らつれしる。騒人のうたうたさけ
ついの川の汲まうとふそて須。此家よ末流の観
音の座須。御堂たてし折あれまうてや。かの
そのすのう草の庵はうしかよ。雨露もたまりし須奔
月とまるうかうまま。一しもせ見むことありて絶金

へいさう執筆人まゐりて此銀扇の御前にはい
まゐらせらるゝ此本意をうけつゝ古への
ひかるゝ御堂供養せられつるよしんのうちて
申玉て作りなり。蓮会をして申し事けりけるに
よりあへ。御堂と造りまゐらせて。人多く集り
おしよせて入たり。要敵とてその御堂へ参りて
それは形彰の機凡りきそとちらうら
まおゝらむもの為を解しなれ。能書とはば
しらぬ物神帳の細よりつきしれたる弘誓の
あまたのまうしこいつらも無めしく
ゆかしくて

さはかりしか入江よあつまりみれはゆうし
あはれなりしのさしらくめと
天龍とぞ名付たるあまくうちまき。川あまく流まて
守しくさる秋のあふさきらもて每時そなれ
ことも遠かられえぬ住吉の榜人まやもくひ
乃居たりつきかたし此付けまきおる時毎
なとも其のつりうえりく。鹿のとえりや
なるをもよひあふりとけしそ。彼丞渓の水は
流れゆいよせしくも。いと危きんちとも
志ら雨をともんめんてかれて。志つ
ありなからしと聞てみて。あとよつさおて

あはれ世をうかる道のもとりこさうるゝはへや
おのが竹のよや流る世井の
人は人をおもひひさそ見る
きを江の宿は由比の浦につきぬ家々の宿
かりく一日二日をくらし又あれは南の方
小舟より榜出て浦の名所見あるく
浜は白くさらの洲の間に洲崎見え漕りて
南は植浦の波袖と濡し。むかしは松の気
人をとゝめてしらかの御あかりし播磨の
宿りてそ松風に時雨の跡をつかまうる浜
ゑゝもしのはら浜しとおもふまゝに

とはおもひつゝく
　浪の音も松にあらしもいはの浦よ
　さぬきの浦のとまりとそきく
こゝのまさごと咲ゆく社が子浪ぞその御前
をすくしてはうかゞおもひつゝ書きつれし
　ゆふ霞れてきけてそ霞はしは今出てもよ
　見のゆかしき神の志るし
小夜の中山は古今集詠守によりてありぬる
とよまれ作は名高き名所なりとて
よれもさるよりおくれそひし水は源山にて
松枝嵐も言しく、富士の山にして秋の花盛

しげり谷よりも巌よりつたひこゝら雲のかゝりへ谷に
ちりて、菊の長きをいはひわたりて世のうつりこそ
あはれなり

なき海よふるねの枕とはしらで
雲にあとさへかよふの中山

此山越て行に菊川とい
云所あり、むかし承久三年の秋、かの中御
門中納言宗行と聞えし人、此乱ありて東へ
下されけるに此宿にとまりける夜、昔は南陽
縣の菊水下流を汲て齢をのぶ、今は東海
道の菊川西岸に宿りて命をうしなふと

ある家の柱にかきつけられけるとぞきこえし。
いと哀にて其家を尋ぬるに、先に焼てしるしも
てなきのよし、むかしのあと今は跡と
て残りたるを見て、あとなく侍けるも
ことなかなか世のはかなく哀なりけり

あはれ

その代の家もこそ今はかなきあり
あとはからせぬにをしほれるいせん

菊川越えて行かば一村の里あ
りとかやそれにもはかなきをしめるを
小すくうらのわかれやまの奥より大井川

殊見渡したれば、遥々と広き河原の中に
一筋ずつ流るる川は浅けれど、深く入
らひつる様して、まなかしと見ゆる
みちの中くまなくこそ見えけれ。除雨あかり
ろく打ち渡したる岸の紅葉こぼれて流るれば、まし
龍田川 すぎ給ひし、さまざまやあそびける

日の脚も水の錦のあはれさに打ちわたる川
もろともに見る人もなき色の錦
一まへ鳴の宿ならで、悲しきのいとど久しく
ちらるるかくこの松はほとりに立ちてありける
なかしかりけれ。風冷しく精にかへりくるけり

て、葉のなかより龍家ちらし錦をさらしてなれ
ける

ちれぞこの間に紅葉の色し思ひやる
松のあらしよそにしてなげけ

宇津の山辺に行けるは、つたかへでは志げりて
むかし物語に見えし、後、枝葉ともにあらたまりて
すべてしかん様いつもたかくして見行く
とほき道のほとりにしもとそ色かはれる
无縁の世をそ人あるまじき所をまで
かきあらしたれば少し入るところにかかる
菜の庵ありける独の僧あり、画像の前に向ひ

なとうあ賀せさく。浄土は法もん専ら修けり足
ありにはつきにあはる物なし。發心の始め衆
為こそは浄土を身にまとひ此世のこと思ひ残しも
思ひえらるれ出離の道心も修しやう人々も身待ち
ふるさまよれ大理を観ぜる身にゐらしく。佛
を念ずるに性をのゝしる。難行苦行の二の
道。かたとよもをすちと之くとも此の中より眠わる
い生てありて勤まることまつれるものあり。ある
人の云ひしはまつさく此山に居る法師ひとつなま
されぬ年月をおくりけるがふと出し叡山
の首楞厳の中に入りて後に是乃慈悲の也。

許由が類ひの月にすみしもの清きより一
瓢の器をもさけりといへるも此庵のありさま
にぞ。孫叟が嬉しとぞいはれし後の事え次、柴の戸
にふるなく侘あかしても、雨しいたえずさ夜ふけぬる
身は孤山の嵐の底よりやうして、かれ浄域
の空はれよと夜すがらいのりねとも春くみえて、
すゝめられしとぞおぼくし

世といとふ人のすみかやふこし(のイ)ゆみし
うき山色のも深ぬるかすみてそ

此庵のあるじ浅額寺よし法師としなりしが、はい
ありて、又かくる辛抱婆娑の事難をのがれしも

見ゆるに。奇ともあるべし書付るは中ごろ。末
路は山城せよきん宇津の山。嶽を越て蔦の
ほそ道ともいふとかやて見ゆるはそれ當
よ云なし
これもまた寄代せられきんとかや乃やす
ふるくもあるつきぬもこの清見
梶よりもるとしよ。あるは東路に名残たるく浦
もあきくらよきかはさ海なる塚あり。人によ弱
それは梶原の墓ともいふ。道のべに
於けるとなるとよあるとみるよ。顕基中
納言の口ずさみ給へるきん。年ごと小春の草乃色

生きるとよ人の詩は出されて。是を又かなと
つくなりたるは名たりもおかしとあはれ也。
羊を傳う詠は汲みしね友にありし孫人は宴よ
も昔に…ゆし給へん。彼梶原が二代將軍の（將軍ハ 仁元）
恩に驕り。武勇二男の為に代ほらとそと
は人あしくそしてれけるが御前か事ふりまきん。
一人の横ふうくして。息はやがて亡ともへさりしが
又はそれはとまでものいふとやおもれあん。
執のこえ聴ならしける所を駿河宮にうつくしく
所まてうれはきるともうつしかさ宴まで
有けるもや氣に思ひあつせりく。懐波の清見

駿府へ赴むかせ給ひくらん志戸と云處にて
くれさせ御座しけれは紙硯給ひのは
ゐてくまみまいらせ給ふよしや君前の玉は床そ
をかさらしのちへかへりせしとよめりしある
なかくらせるまゝかへりにはかりて玉を湖のあたり
まいりふとよすみかねたるをすゝめありてみちやに
むかれは昔日ゆ
あはれみし見はうかれし玉鉾の
みちのへかしも名残とゝめてき
清見か関をこえくて演史やとゝ人々仲の君
むかしく坂手にあつかれて波よ関の壇

屋とうつく風よさらにわれく煙立れしよりも
東路のおりんしらるゝおほせへさしもありかな
昔朱雀天皇の御時将門といふ者東にて謀
反おこしけるをたいらけんために民部卿
忠文をつかはしけるに此関にいたりてとゝまり
けるか清原滋藤といふ者民部卿にしたかひて
軍監と云官にてゆけるか漁舟の火の影は
寒くして浪を焼駅路の鈴の声はよる山
を過ると云唐の詩を詠しけれは民部泪を
なかしけるとやきくもあはれなり
清見か関を[illegible]ゆく人て

なみのいりかゝりけるとなん
此関をうちすぎて北に奥津といへる浦あり。海
をりのはまにはやうなりもいでゝ、かたの。空
浦の波の音もいとゞかなしくかゝるけやらふ
かうして、庭もとうしもかなしく

　清見かた磯にてちかき旅枕
　かけし波にて袖はぬれけり

ふるさとはいとゞとをくなりけるに。
草の枕のかりねもあれは度覚えてすゞしき暁の
空よりいでたるる浪と云なるあら磯の岩の
くさ海路の岸を見れば。沖津風も身にしみけり

打よする浪をハいまなきれて、いとゞ塩やきの煙も
こゝろのうちハいまよりかくしてかすかなる袖
の露まそほちけてをりもいとゞしく旅の空そらの
しほたれ衣ぬれつゝいとゞ哀なり

　沖津風けさあらき磯の岩ほにハ
　なくさめ衣あまりくそ引

神原と云宿の前を打すぎ行けるほどに、これ
なる若者つれだちて、あるは声をへだゝりて障
子を抱きたるをとられハ、旅衣もまた身の夜さ
むしろをつりをまうけ、富士のしもかと云
哀なり。心あるもける旅人のまゝにこそあれ

らん。黄香嶮峯の襟に居をしめし隠士
ありき。竜の鬚蘆をあまくだく岩は雪は白き色
なし。今富士の山のありさまは菊とうつろひ岩は
見えさゆる秋夜を行なで山の雪は世の人ぞ
誰見るもたよらすまどろみかけ侍

ゆめの秋にいかにと山の見え雲しらく
音きわれの雪はわすれや里人れ

田子の浦ようち出て富士の高根と見れ
い河ぬよみし雪ふれるをかくへいはんと白妙に
あり清書して天よふれるをそうた繪の山
なりとてよみけるも。貞観十七年の冬にし。

白衣の美女二人ありて山の頂にならひ舞しと。
都良香か富士の山の記に書たれは。いかゞ
をかしとおもふへし

海の原は風のふきよせて雲と
見え浦乙女の袖かとそみえぬ

浮嶋か原はいはくらも見え南より汲出し。小
富士は麓して西東へなかくしてなかき
沼あり。布はひろうしてやう山のみよりて親を
浸しく。東も北もひろ何ありて。芦ありて小舟
かくるまゝ棹さして。むれゐる鳥かけてあそふ
ゆき哉。菊は海のおもてまてみなかくされて。

雲の波煙の波にて海をさかへかへりみるにえ
孤嶋の眼にかゝり處々にあらはれ帆の立
まつかれるはのそむは方あ方の眺をといつ
きもなしくよからそし哀ふは悠然乃煙は
なえく立らりて、前は松の精をむせる
哀蒼は海のなまうのく、蓬萊三の島の
ことくし昔よりよりあり、浮嶋と云名付
るりとせり、其のほかに神仙のすみかゝり
りやあらんとて松くゆしくる

新はえは浪の入えり中の根は
ゆきつりもきと浮為かなし

行く此あきつてまなかの松島といふ所あり、
海の波をそら浪松くらよせわりてみるを
の浪さいかなし、沖の舟をも行過ひて、来
於保のうかみやうは雨彼る株の松は下の峯
寺一葉の舟は千万里の身とつれる小舟を
見もたう色は眺をといつて見を海さりそう
みさきせは立むの松は末悠とゆを
是なるまにつても浪のえらぬ

車返しと云里あり、武家よやかうりたれて、
網つりをといてとたゆ様しきこゝのつすとかしは夜
のやとりあるうことありて康のき遠をかまあゑ。

うつり明りの枝縛我人の夜半乃旅ねをもかく
やあまきもしと思ひ

あれをこのつまよそるあ海の皆むすし
いとふありうや神行術つらん

伊豆の国府よいたりぬれば三嶋の社のみしめの
うちをがみ奉るに松の嵐木くらく音信て庭
の気色も神さびわたれり此社は伊予の国
三嶋大明神をうつし奉るときくにも能因
入道伊予守実綱が命によりて歌よみて
奉りける時炎旱の天より雨暴に降て
枯たる稲葉も忽に緑にかへりけるあ

らた神のしるしなれは ゆふたすきもかけまく
もかしこく覚ゆ

せきかけて苗代水にながれきて
みあまくだれる神ぞこの神

ときをあまる道すがら此御やしろを立出てくれ
ければいそぎて箱根の山につきぬ岩ね
たかく重りて駒もなづみぬべし山の中に
ひろがれてたへて箱根の湖となづ
く又芦の海とも云ふ権現垂跡の基ひけたら
くめぐらし朱楼紫殿の雲よりうきかけたる粧
ひ唐家驪山宮もかくやとみえ巌室石龕

波よのそめ給ひけ。銭塘の水仏なるとよいひし
しられしき侵なれたうき身の行衆
たち人せき深く給ひ年しいのちく。法施なさつ
みてくよ
今まさへおりひまれし霊の海の
姫うさめらは神よ海のせく
此山をと無かりて陽本と云所よとすきされ
いたる山めくりくまししく新河あて。谷川みか
ろうり海さり。黒瀬の波さるくむせふ。暢鉢房
のよろ給さてみをすさきうき。枚源氏物かたり
給寄よ。みなそこのまれ浪瀧の音かれと以人か

みなひより給くあくれなるる
それなりし世るゆくいかさらとそれの
蓑縁ゆるさ世流の音、の那
此宿（山イ）路を云て遥舎よつて。日の夕川うさ面
儀りかりて人うさもれありて行ゆやいおく人を
のきもそめられて。大磯江鳴とろうしう泉おもゆ
ゆる所とと見えとしろとかまうて打き所
こそいとんもれ並両を言うるかりてたつとと
ねれい。みかりしのいりとかや云所よ。ゆやしの
綾か原とうちく。そこより世。常たる石よ
むかひとい門おかし。行人征馬をくれのまに

ゆきちらしひらかは山ちらくして宮ありのそ
む。麻の葉虫の声すきのうへよいそうり
旅店の都よりしかるさまかりて見ゆるを
うつくしつてありけるにかてよつけくを
なくさむやらく象潟のつさ浦三浦のこれを
年ととふ浦々を絡くみれる。海上の眺望を見
とめかりてこしろさよ見ゆるくやりける
所くみるをとうし波ゆかる

　さしいさいもはしきの浦々を
　ひろかるめの沖の帆の舟
玉かけ三浦ふ浮ふの波よかり

　此寺は月の亭ともさやけさ
称名金沢もしめはせはしは故右大将家よりうえ
頼よ北の尾は御門の九乃世れなつえとなき
き人ありてとさかりみし浪影のもともありけ
なりく戒壱を揚く朝献とおいえすまめ
恵常まさりて瀧山の淀を綾く将軍の出
を将らり音鼓と此所しりしり仏神とそらの
みそりて家なまりまかうこのえ。今盤色の紀也
なれつとおりみて鵜長乃ゑ文ハ松栢乃みまち
いよく志すく蘋蘩のそえへりくほとりまうし
清浄をと定めらく四季の法会楽をとこうし僧職掌

に修く八月の放生会をなしけり。宗祢乃
いけらしをなす社よりつゞく。次を寺中。二階堂は
ここにたてられしを寺なり。鳳の甍日に輝
き亀の穢寄にあらき。楼台乃荘厳をも
ちりめく。林池のあそびをいふもさらなり。耳に
ふれまして又御堂とらで呼ぶは石巌
の上にたてりて。道場のありしたちらる所
あらそひ見し。禅僧房をならし。此月をの津
から紙宮の観於をつらひ。行法庭をおさね凡
そうなるに金磬の音くさとさえふたゞ於く
なし。修代くの将軍の下つきりえられける。

松の社蓮花寺ありてまれおはりし。宗祢也の社の渕
とこ所に。阿弥陀仏の大仏殿何ろをなりよ
しかるゝ人ありき。やゝく年をへひく傾いた
きしたるくありしまゝしをの於こりも於尊
ありけり。前は鎌倉の人定光上人とこ色
のありき。さかし延応の比より。関東の民をかゝ
いやしくことすゝめて。仏像をつくり堂舎を
建たりける功もそうりこゝ二ゑしとよふ。
為擬たくありけれく。中天のやもくいまも。
白毫あらきゝにみえさく。満月の光もとう
やう渡。仏もとちつりゆ三年乃功をとこやう

またむかしは堂つゞき十二楼のかまへありしより
たり。抑東大寺のおこりは聖武天皇の叡
願。金銅十六丈の盧舎那仏をたて給ひ。天竺
震旦にもなきといふほどの仏像とぞきこえし中頃
此伽藍治承に八丈の頭長やかれたる。抑大仏のかうべ
もおちすゝめ給。金銅不像のうつりかはりこそあれ
ども。末代によりてこれも不思議といひつべ
し。仏法東漸の御よありがたく。権現力をそへ
ありしあまりて然かゆゑ也。いかにても我人
こゝろもかはらと悔しすゝむるいとまなけれども。ふ
ともかくも武にもうけくばるにすゝみ

つよく浪もたかく浪おとしきりにかはれば日暮ゆく
ほとりは寺船のたそかれきは海へさしかゝる
むしもむらくもおりて秋ふかみにかはる。
蘇武が漢をおもひし十九年の様懸。李陵が胡
にとゞまりし三千里の道に思ひやる
から浪。関なれしむかしの暮色やるかたなくそ
そゞろ。松吹嵐のおとそいとゞ悲しく成
まされる。懐旧の涙をかなしみにうたれてぬれ
つと鶏のうたひなるやゝ。ねぶりしは一声の鶏
うねの雲に消ゆくも寂寞たり
　かへる雁ゆくしらぬ夢むじの鶏をも

なにさそや旅の空より出かゝり
かゝるとよ神無月の廿日あまりのほとなり
らされはとこのまゝありて都へのほるへき
よすかもなけれはたゝこのあたりにさま
よひありくも旅のつらさなりけれはかくの
そのひとりあるものは吉野に帰りおはし
たゝ米買侍るにもあはれなる事ともならに
あるへ又人ある山かたより来りしより
やまとのほかの旅路にもやこえむ
十月廿三日のあかつきすくる鎌倉とめくる
みやこへおもむくに宿の障子に書付

みれねきは船といふらく宰さなれと
されらなみのみしはやとぬ

斧柄序

源通光

昔九重のうちよ故ありしことも人すみて
くたりしつまし猶ては雨のつまよそとめて
難波の浦よや塩のかゝるむかし井を歌
よそてしはりもあはれ年月すれはからの雪の
積りゆと数ちて鏡の影もおもかけはいかゝき
こりゆしく玉ある年をまわれ人風乃
音やうらにきれきし枝もうつろって

永く老目いつくしう言しかたく見て行くは。
谷は常磐しほくかくく、千萬乃行よ新ふすり
をへとゆうくつますくも、物しょふあはぬもれこと。
ひとりありもりのかわりふ門かくこそて。
はきくくと昔今のおりひつく祢くこるかの松
をむりしは茂りは事くとあすく祢しも。
座おは宗くとふくに人はり。歌あうんと見
まいさ乃エよてなれまし名おらこうう次
見えすいわれしきふつますくもかく門志は派
あまりとりかうらく其事よあすくかくこら毎須
し。斧のえも朽ぬへしきくもおにくはむき。

よしありと思ひとりて行かく、わすれ草も浪
打よらぬりけはすくくりかうさつかはれ
まいりにふも毛と夜よてあし言し行うて。
おきさ歌はうしことごり数しそうあくく
古今集乃序ふ亭人たよする雨乃見て行
とも見へつもとくおきさ事行めも拾うこれ中すり。
此みりいうて雲りひらりきんと見所ゆかく行
うぬ。今はせよいかくそれすほへさ人ともれしやと
ひそく。歌人云せうり人ゆよるへく。萬乃おも
まさ昔よはあうさ折り。此にりりや山道の
沈そうしお。樹本乃塵つちれして昔おおふは

多くはおほく御らんじけるにやかしこまりて候ふ
ゆかしくぞくらむ。むかしの春秋の紫の秋月は夜宮の
おしなべて、うつつ宇治かけひよそほひ見え給ふ
こや。源氏まをとこを、かくしおもひよれる人も御らん
竹の園生をもの門よりも、朝に御所にをかせ給
きて、明月のくまなき道しるべ、歌とて
たなる海の袖浪とあはれとよみ給へる。
見えしあふぐ人に十七八人ばかりうしろ御門かは
かへりなどとこいひはやしてさりとてえうらも首
いふ心ゆかしきありける。とふおりしに定め
給ける。永く日なれども春の葉も頌さ

紅葉はいといみじう門に山深く日暮れこそこ鳥とこ
りけむ。帰りがたにいとよそ見けるにぞ思ひて十
日のみなもかなしと、秋の旧き跡浮かんでも
めづらしくなん。これらんでも心そも転び
御経よくまゐれるを御覧じ、様くく見給ひ
て此をのや。昔物語ことと古人の筆
かくして、古集あらば御ものぞして見ん
御らんぜば、ちらしくもとたんれと多く
見て御かれ古ぎらんむ歌よ古今哥文こそ
いまして経御ぞ、凡八十首に餘れるもとて
ば心ぐ御らん義理と見んとあかましるより

もそ三雅とゆやあらん。又ろ於教して堪不とし
まとゆや阿しむ。己いとろね祖みり。覚てあろ
人於とれそれ毛多く仰ら。今それ人々とそりく
もくらあをいろ言をい雅く。阿し十なりよ歌
を入をりとこゆる奉りも仰り。かきく跋
しくみて綺もいおそもそうらいふと仰ん
かし。ろう辛●母えひしく月ころをに
仰りね

七十賀歌合跋

藤原光俊

祢ミ笠山乃あふくしるし志百代を仰ふ八十氏

河乃浪於文字よせくるをみつ、今こそとてき
於みとおりくらりくむを治め政をとしく
とわさ前てりし志る事しこ世ともいふにへとも
長し今をも見ろうみくせ縁なしく、歌合於と
おり是を祖云綺、治乃戯そうのことふもあ
ら須、故長保大臣於歌を奉く、表逸と七
者ちの歳こ於い、判料と七うらの絶り
せことるへり、あそりのそ絶くい面白そうせこ
むすくい、嘲呼をりへしとへうくまこの浪
つとあろきねと、道をゆへしといふそ、に
よしかすろみいむの今こそきえをして。

昭りたるよのや、おもき一傍ナおらぬ
をも定めかゝらるゝて、鄭衛の(の)うしをを
うらく、雅とあらゆるきよしゆえ忘れハ常
備せのいきみさらうく、浪慶浦にすま
ひをそよつりハ、珠玉の篇をとうくれた、
鴻鵠は恋されかしうつら、積様乃詞と
豆しことハ、蘋蘩の情ふ下としうね恨て
深りゝし、作者あいされ扨りとむ
よそも襲もと、遅さんとてそれしうら、之故
と溜て新ようかれとゞつうくて手
付くれも秘うれ下いわりよ乱れやんし

此よとおりてひとつうき穂わかれぬをそ
うきは二のふたつ別ゝけれ、早くきんやと
それとも思ひ眠とあし、急ひとそれた
身ハ病りしもとよもり、巧みして遅きま
とあるらか、傍さうくして速うすれハ、あ
されく、とこしれ所いよく趣をれきよの
うきかくれとまのとや

弘長歌合序　藤原為家

大和歌ハ敷島の花のえ、たえたやしき
家のとよまさす、絶て、志ある者ハ月乃妹

しかし雅ねよりかくれてあそひ物かたり
まなひよりよろしく道を深くまなはん人知れる、
蓋此赤人人まろの古くひより、をとは乃宝家
家隆よなみふまて、難波津よ立わくらうるさ
あきらかれみろほとひろひ、はしく山よ分入く、
しけるよ林の一枝をもとめても、すくてあのた
の事人の心まらくなれ故よ、海あまの
見くも歴をさしくれ、山ありとすてもお
くをしつさる事れ、やうちうるためしてよ
しつるくれよそり難きく、やすく道ふり入むひ
をかしつて、身此ゆるせれなきゆひなほしきけ

やさしくに松山ゆりうくてそれをもとまされハ
しらうりよかくらく、神代の雲ハ梓にみよく
たちれ物なり、しつくあまりとも東ちの雲き
山風世をあらひし和哥のうら浪さの月
道をとくちる、折たまさし開の末のりしこと
しつくをとりけて都のうちよ集免記なる
こゝとあり、則いける諸人の教と定くよ紡され
哥をよみ、首をつくふ色さよりあり、しつくれ皃
とのすひゆゑハ顕をましそれたさを共ひかく
わする恨りなれかくし、又しまりはよりりく
わらく未濁濁濁未澄濁澄の飛もかくなる

庵をれたゝ題に凝ち猶はらくれを進ひ
粉蝶のゆめ〳〵此によそへてかたるたゝひにな
すらへく名のみ一字ゆ好なる題撰ひ
卅六人と名はあてはらく此とそ前大納言
為経卿まうし妨たるより己によそひうくされ
此わさたすれつ〳〵情ものいさかひと何ひ
見るよしはらろもとのら法てく哉とる中
に一番左の哥すけいひしらす撰なる次
るなるおもひちる所なり也れ弁の
山風高くして詞の花八雲の色をそへ
筆の花露にうれしく心の色ひさの色を

むかしへまて寛ようしこかりし代〳〵のあとに
雅くそすつらうるれ先の法をあたをしにける
ことはさめて道のやはまそてもあつかし身の
歴なきも法のゆきを待ら撰かはいかのうち
新あまとし一巻のうちにあまた歴によりて
うつそあともくは道くてうまれたゝ六十へ法
すいこゝり深したゝひふりあらしてわさ
をゆくむさいふしても定りあらしこなる情と
用ひられ雑つ此へし干時弘長二年な
つ月の法筆をとり染てこれを記しをつわすて

宝治歌合跋

同

抑二代撰者の沙汰とりつゝ、一旦判者の名残けかし侍ること、かたくのかれやせん。甚愚蔵にして婦りく、殊に涙しつゝあ侍りき。此道こゝろざし浅く、此かへ侍るに、猶に庭つ霧くれ斯たらく、頻にてしきむ浅披あるをりや、へきてのし、今も披風をのみ世にあ清れく見及思ひおせれしに、殊なく筆にまかせて書付侍り、清こゝろさし綱をおのつから知りをおもひて、いさゝか残すことなくい侍らん。叢へ大をうつ清石をうしなへ侍恥た。

ことに逃れへきにあらず侍りて、愚かなるを用らるゝ世のすゝめ、おそれ多こゝ縁ていよゝいかゝへてこそ侍るへき、ここくすゝみ来り者くもきを補り、いよく、よしあしまよひ読侍まゝにも、たゝ時よわたきる撰をまかれ家をもちて、後の日のあさけりをまつ侍るさる所ならひく、り此石を学へるさゝもつゝまし又こゝらに残りきまぬ人侍らんも、難波津の波そむかしのたゝしきつるにかへり浅香山のたゞいにしへはうるはしき沙汰と思へきよし残しつゝまる身よ思ひ侍所、其つゝ人に

をかしかりけんかし

古今著聞集跋

橘成季

おの集は起りは、帝そのかみ詩哥管絃は
みちくたり、時有とりて諸まうる物語
を集めて、絵ようさきやう見むのさためなく、
い抄のをを物ねさむしはてより、浅茅ふす
つたはなさけみいさゝれまでいろく動へは
まよく記すわ侍り、他書物をかりあつめを
よひてきこえし聴をそては書集むれは、よ。
夜野の草ことしきく、森はおもつ繁叢也

ひ侍あたり、ちかき抄こえちくおもきことゝ絵
ことりまきしとを、左へよりよれ事をおしき
ことをもろしときゝ侍らすいまされのゆゑさ
をもふなさけとのおもし侍べき、ちかきに
よりく或てあまに記録ちうしひ或は
あまくの諸絶をあはする、しこのくもりを
あ淫はみゆさをまの淫くひ、あさきる
むなはてふまのおしひぬはまとそすゝふ
閑はてりこうく事とをこちはれせまつさ
まあくう異はすもたしうわるしも海
しまたへきしぬのよ記をとうち巻紙

さらめく。此篇二十巻とし、次篇のちかしく
小那ちのことのをとらをとへて、つきしくは
その物によりてあらいせり。建長六年十月
十六日をいれ京の準歴く諸寺管絃
の奥域よよらすかわい此集校三乃道より
起こまるりとりく。白楽天人九庵承武
乃書記を出けて、甚前とり多くの催抱域
地の文酒脯菓菓は眞域備くますの廊
くりたし紀く三十篇のそしつき。弁物謌
一願をよろんあく謌るにして多きのしる域一つく
せく。呂律入曲を唱ふ謌よ詩くを謀ちを賢ふ云。

名来文學家一字謌よ和謌を謀きを賢よ云。
朝謌蜀夕蔵綮寄鶴祝とのく枝謀平
て朗詠あり。嘉慶令月謌よ泰山不讓土壤
謌り今生世俗あ句あ世。弔られあれを
出謌人くしたしを謌只式三ヶ此郢曲の
ら謌りて竟宴はよ多謌と歩ることのたちう。
謌よ一獻の盃をとうび。二獻よ箸をそへ。
三獻よ文郢曲あり。そのうち数獻よをよふ。
色の歌謌あきをたんとりて人く様域そへ。
今多年收拾の功を遂て一部竟宴の儀
をいれ。今日此律を様うし此ゆくをしろたら。

扶桑拾葉集巻第十一終

国立公文書館
National Archives of Japan